農業小辞典

監修

近藤康男
岩住良治
田中長三郎

農業小辞典

監修
近藤康男
岩住良治
田中長三郎

博文社

昭和二十九年二月十五日　第一版発行
昭和五十二年六月十五日　第七二版発行

農業小辞典

監修代表者　近藤康男
発行者　鈴木貞義
発行所　文化書房博文社
東京都文京区目白台一―九―九
電話東京(九四七)二〇三四(代)
振替東京　八六九五五

印刷　松浦印刷株式会社
製本　山崎製本株式会社

(落丁本・乱丁本はお取替えいたします)

3560―20251―7361　定価は箱に表示してあります

序

わが国の農業は、終戦後、農地改革を背景として、社会的構造を変革したが、技術の面においても飛躍的に展開し、従来の集約的農業は一層その度を加え、商業的農業はいよいよその特殊性を発揮し、有畜農業の如き新らしい分野を加えてきた。かって思いもよらなかったものが農業機械や農薬として用いられるようになった。作物や家畜の品種改良も、新らしい遺伝学に導かれて、新らしい進歩をみせ、農法もまた革まろうとしている。あらゆる分野の学問が農業の分野へも用いられようとしている。昨日までは、学者の間の専門的用語であった言葉が、今日はすでに法令のなかに取入れられ、明日は広く一般化するというのが、今日の実情である。農業に直接関係ある法令だけをみても、戦後無数の新らしい言葉の用例をみるのである。

進歩的農業者が新知識を必要とすること、蓋し今日の如きはないだろうと思う。博文社において農業小辞典刊行の挙あるにあたり、その監修の任を担当することを求められて快諾したのは、一つにこの社会的要求に合することの意義あるを信ずるからである。

思うに昭和九年、日本評論社において農業大辞典上下二巻を刊行されてから既に二十年の歳月を経過した。今日の農業辞典に必要なことは、かの大辞典に欠けていた多くの新事項を加えるということだけではなく、むしろ広く網羅した言葉を鳥瞰的に理解し易くすることであると思う。

詳しい専門的知識や深い理論そのものは、それぞれの専門書によるべきである。本辞書が、小辞典として中項目乃至小項目主義によって九〇〇〇という豊富な言葉を集めたこと、ならびに、巻末に索引を附して関係事項を探るのに便を図ったことは、右のような考えに基いたところである。この索引は、更に専門的知識を求めようとする人達にとって、一つの手がかりになることを期待するものである。

本辞典の刊行は、最初の企画から数えるなら四年を費し、執筆してからも二年を経て成ったものである。その成功は一つは出版社の忍耐のたまものであり、一つは編集者と執筆者との良心と精力との産物である。記して敬意を表し、監修者の辞とする次第である。

監修代表者　近藤康男

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

利用者のために

この農業小辞典は農業技術と農業経営のあらゆる術語、用語について平易かつ簡明な説明を与えることを目的としている。従って、その範囲は広汎多岐であり、項目の選定には慎重な努力を必要とした。特に農業技術の日進月歩と経営や行政面の新らしい動向に対処して第二次大戦後の新語を広く採録することに努めた。農業を指導しようとする人、農業を自ら営む人、また農業を学ぼうとする人ばかりではなく、一般国民の教養のためにも、ほんとうに役に立つ辞典となることを念願して編集にあたった。もちろん、この小辞典が完全無欠であるとは考えていないのであって、利用される方々の御叱正を切に望む次第である。もし幸いにして版を重ねることができるならば、そのたびに増補訂正をしていきたいと考えている。

本辞典を利用するための若干の注意すべき事項を列記しておこう。

(1) 項目の記載にあたっては、国語（漢語を含む）はひらがなで、外来語はかたかなで示した。

(2) 項目の配列は五〇音順に従った。但し、外来語の長音には「ー」を使い、発音される母音があるものとして順序を決定した。また、同一の音については清音、濁音、半濁音の順序によった。

(3) 各項目にはそれぞれ該当する漢字を括弧書きしたが、極端なあて字または全く発音上の関連のない漢語は省いたものも少なくない。

(4) 他の項目を直接または間接に参照すべき場合には——→の符号を使用した。

(5) 本文中の植物名、動物名はなるべくかな書きとし、誤読のおそれがある場合に限って傍点をうった。

(6) 作物名等のうち、歴史的な漢字で現在はあまり用いられていないもの、例えば菜蔬や胡蘿蔔はそれぞれ大根、人参と書いた。但し率果（りんご）、浮塵子（うんか）等のような漢字を便宜上使用した場合もある。

(7) 度量衡は原則としてメートル法によったが、慣行のある単位はメートル法に換算することなく、そのまま使用した。

(8) 文体は平易な口語体を用い、字句を簡単明瞭にするため、名詞止りの文を用いた場合も少なくない。

(9) 巻末の索引も五〇音順であるが、同一の漢字は一カ所に集めて検索の便をはかった。また索引の末尾に主として項目に使用せられている難語の読解に利するための難語索引を総画順に掲げた。

(10) 執筆及び編集をした人の名簿は別表のとおりである。

この辞典は出版社である博文社の多大の犠牲と長日月にわたる熱意と努力がなかったならば実現しえなかったであろうことをつけ加えておく。

編集者

あ

アークトチス　〔羽衣菊〕　きく科の一年生花卉。葉は菊に似て草丈は六〇糎前後。花は白色、一重でマーガレットに似ている。播種は春。五月頃花壇に移す。開花は六—七月頃。

アームスピーのしようひょうじゅん〔——の飼養標準〕　アームスピー氏が呼吸カロリーメーターを用いた研究の結果、家畜に給与すべき養分量を決定した飼養標準。飼料の乾物量・可消化純蛋白質正味エネルギーの必要量を各家畜について算出したもの。——↓しようひょうじゅん

アーモンド　トルキスタン及び西アジア原産の果樹。中国では巴旦杏という。乾燥した気候に適するので、ヨーロッパやカナダでは栽培されているがわが国ではほとんど栽培されていない。桃に似ているが果肉は食用に供せず、核を割って仁を食用又は採油用に供する。核の硬軟により堅核種と軟核種とがある。

アーリーローズ　馬鈴薯の品種。主として北海道及び関西地方で栽培される。明治の初めに北米合衆国から輸入された早生種である。薯は楕円形で淡紅色。肉質は粉状。収量はやや少ないが、澱粉含量は多い。中間地帯では退化し易い欠点がある。

あい　〔藍〕　藍色の染料をとる作物の総称で、蓼藍・印度藍・琉球藍・山藍等があり、植物分類上では夫々全く別の作物である。

蓼藍（たであい）——最も古く中国から輸入された染料作物。たで科の一年生草本。高さは五〇—八〇糎。茎は紅紫色を帯びる。葉は広披針形で互生し托葉を有する。夏季紅色、穂状の小花を開く。品種は多く、小千本・百貫・上粉百貫等がある。栽培法は二—三月頃苗床に播種し、四—五月頃麦間に定植する。定植後、補肥、土寄を数回行う。七月頃開花前に第一回刈取を行い、ついで切株から生じた新梢を、八月頃刈り取る。刈り取った茎葉を適当な長さに刻み、茎を除いて乾燥する。この藍葉を寝床と称する室内に堆積し、時々水を加えて切返しを行いながら醗酵させると、二—三カ月で黒い土塊状のすくも（蒅）となり、これを臼中で搗き固めると玉藍又はあいてん（藍靛）となる。藍靛は藍（$C_{10}H_{10}N_2O_2$）を普通八—一三%、優良品は一六%含んでおり、染料、絵具及び薬用に用いられる。

たであい

印度藍——熱帯地方で栽培され、まめ科の灌木。明治の中期以後印度から輸入され栽培された。木藍ともいう。

琉球藍——別名きあい、山藍（但し次のたかとうだい科のものとは異なる）。きつねのまご科。熱帯地方の樹蔭に自生する半灌木。高さ九〇—一二〇糎。葉は卵形または狭披針形。夏季淡紫色の穂状花をつける。種子によらず挿木によって繁殖する。

山藍——たかとうだい科。わが国の南部、

台湾、華中等に自生する多年生草本。高さ三〇―四〇糎。葉は広披針形で暗緑色を呈し対生する。春に葉腋から細い花梗を出し、その上に数花ずつ集団した緑白色の小花を開く。わが国における最古の染料植物である。明治中期には藍の栽培が盛んであったが化学染料の発明以来急激に減少した。

あいがんけん〔愛玩犬〕主に室内で飼養されて愛玩用に供される犬。一般に優美温順で体軀の小さいものが喜ばれる。トーイ・テリヤ、狆等は愛玩犬の代表的なものである。広義では闘犬、競走犬も愛玩犬に含めていう場合もある。

あいこく〔愛国〕稲の品種。一時相当広く栽培されたが、新しいものと変りつつある。品質はあまりよくないが、比較的不良環境にも耐える強健種である。

アイコルニア→ウオーターヒヤシンス

アイスクリーム　牛乳、クリーム又は煉粉乳を原料として砂糖、鶏卵並びに果汁、色素等を加えた冷凍乳製品。商品としての規定は無脂固形分八%以上、乳脂肪分八%以上、細菌数一cc中五万以下で乳酸菌以外の細菌数一、〇〇〇以下で大腸菌が全くないことが要求されている。氷菓として代表的なもので、アイスクリーム、アイスミルク、ミルク・シャーベット等に分類されている。

アイスクリームせいぞうほう〔――製造法〕原料はクリーム又はバター、牛乳、脱脂乳、蔗糖又は蜂蜜、ゼラチン、鶏卵、バニラ等の香料からなる。これらのミックスの調製をしてから殺菌及び均質化し冷却熟成させる。これをフリーザーで凍結させ適当な組織、稠度及びオーバーランを与える。フリーザーから出したアイスクリームを速かに冷凍して十分な硬さを保たせる。この操作を硬化（ハードニング）という。こうして製品として販売される。

あいずにごう〔会津二号〕皮麦の品種。全国各地で奨励され、耐寒・耐雪性が強く多収である。

あいずば〔会津葉〕煙草の品種。水府葉系で福島県会津地方に多く産する。葉は全縁で長く、葉肉は厚い。

アイスミルク　アイスクリームと同じ方法で作られた冷凍乳菓であるが、アイスクリームより乳脂肪量は少なく三%以上八%未満のものをいう。

あいずよんごう〔会津四号〕皮麦の品種。福島農試会津分場で育成したもので、早熟多収、寒さに強いので各地で奨励されている。→かわむぎ

あいちあさひ〔愛知旭〕稲の品種。わが国で広く栽培され、適応性が強く、特に湿田向である。

アイリス　本邦、中国、欧洲原産。あやめ科に属する秋植球根。根は根茎又は球茎。葉は剣状の根出葉で扇形に簇生する。花は六枚の花蓋を有し、外側の三枚は内側の三枚より大きい。花色は白、紫、紅、黄、藍紫色等。二―六月開花する。主な品種には次のものがある。ねじあやめ、ジャーマンアイリス、はなしょうぶ、かきつばた、あやめ、いちはつ、きしょうぶ、なんきんあやめ、スパニッシュアイリス、イングリッシュアイリス等。

アイン・コルン→いちりゅうこむぎ

アウトルック　農業観測と訳されている。古くから米国で行われていたが、昭和二七年から農林省においても行うことになったもので、例えば米麦の作付前にその翌年の米麦の価格の変動を過去の統計資料の分析等によって予想し、これを農家に普及させることによって、できる

だけ農家収入の損失を防止しようとするものである。

アウブリエティア　あぶらな科の常緑多年生草本で花壇用として栽培される。草丈は一二糎位で花は菫色で春開く。

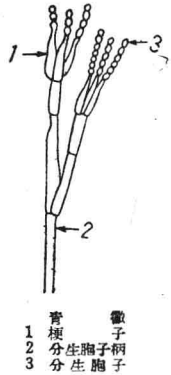
あえんボルドウ　〔亜鉛――〕殺菌剤。ボルドウ液の硫酸銅の代りに硫酸亜鉛を用い、これを石灰乳に加える。本剤はボルドウ液に比べ薬害作用が少ない。桃の炭疽病、穿孔病、李の黒斑病、柑橘の落葉病に効果があり、また散布により葉色を増し茎葉を伸長させる。硫酸亜鉛一三〇匁、生石灰一〇〇―一二〇匁を水三―四斗に混ぜて作る。→ボルドウえき

あおいととんぼ　体長四糎位の細長いととんぼである。桑や果樹の細枝の皮下に産卵して枝を枯らしてしまうことがある。翌春幼虫となって水中で生活し夏季に成虫となる。

あおいろしんこく　〔青色申告〕事業所得(農業所得を含む)、不動産所得、山林所得又は譲渡所得がある個人の所得税及び法人税の申告は、前年末日又は本事業年度開始末日までに政府の承認を受けた上で一定の書類に基いた青色の申告書によって行うことができる。この申告書を提出した者に対しては、(1)家族専従者に対する控除、(2)純損失又は欠損の繰越及び繰戻、(3)減価償却についての特別償却、(4)更正決定は必ず帳簿書類の調査を受けた上でなければ行われない等の特典が与えられている。しかし農民にとっては記帳が困難であるためまだ十分普及されていない現状にある。

あおえしゅう　〔青江秀〕明治初年に鹿児島県の煙草に関する調査を行った人で明治一四年に薩摩煙草録を著した。

あおかび　〔青黴〕子嚢菌の麹菌科。青黴属(ペニシリウム)に属する。麹菌と似ているが分生胞子着生の形が異なる。分生胞子柄の頂端が膨大しないで一回或は数回分岐して毛筆状になり先端に梗子が着生する。分生胞子は青色或は青緑色を呈し、球形又は卵円形で連鎖状に生ずる。最も普通の黴で枸橼酸をつくるものやペニシリンを産生するものがある。



あおがりえんばく　〔青刈燕麦〕飼料作物。子実の収穫を目的とせず青刈として収穫する燕麦をいう。稈の収量も多いので青刈飼料として利用される。暖地では秋播或は春播、寒地では春播。収量は反当五〇〇―一、〇〇〇貫位である。

あおがりさくもつ　〔青刈作物〕飼料作物を成熟以前に、新鮮な状態で刈取ったもので、主に葉茎からなり、蛋白質・脂肪・澱粉等の養分は少ないが家畜に新鮮な感じを与え食慾を増進し、鉱物質とビタミンを豊富に含むから特殊の効果をあげる。青刈作物として利用される主なものは、禾穀類では、とうもろこし、ライ麦、燕麦、あわ、ひえ、もろこし等、あぶらな科作物では、油菜、甘藍類、まめ科では、大豆、れんげそう、ベッチ等、その他では、ひまわり、そば、甘藷等がある。

あおがりだいず　〔青刈大豆〕子実の収穫を目的とせず、茎葉を使用するための大豆をいう。緑肥、粗飼料、被覆作物等として用いられる。子実を必要としないので、茎葉の十分繁茂するものが用い

られる。

あおがりひえ　〔青刈稗〕　青刈の飼料作物として収量多く栄養価も高い。水田に栽培する飼料作物として、寒地には特に適当である。稗には石灰分が豊富で他の禾本科植物より優れ東北地方の牛馬の粗飼料として有望である。醗酵させて飼料に利用することもできる。

あおがりライむぎ　〔青刈ライ麦〕　青刈用飼料作物。耐寒性が強く瘠地でも生育するから寒地春先きの青刈飼料として良好である。秋播して五―六月頃刈取る。

あおきこんよう　〔青木昆陽〕　武蔵の人で、徳川中期の経済学者。本名青木文蔵。伊藤東涯の弟子で大岡越前守に用いられた。甘藷の栽培が救荒対策として重要であることを説き、「蕃薯考」を書いて普及に努めたことは有名である。このことから甘藷先生という名が残った。明和六年七二歳で死んだ。

あおげ　〔青毛〕　馬の毛色の一つ。体毛は全体が黒色で光沢のあるものをいう

あおごめ　〔青米〕　緑色米ともいい、未熟米の一種で、玄米の表皮に葉緑素が残っていて、緑色を呈する不完全米をいう。

あおたうり　〔青田売り〕　金に困った農民が稲の刈入れ前に収穫を見越して青田のまま売却すること。青田売りがさらに激しくなると、米の播種以前にすでに収穫米の前売りをすることさえある（これを黒田売りという）。農民は商人と収穫後に引渡すものの種類、品等、数量、価格をきめて売買契約をなし予想価格の全部あるいは一部を受授する。新潟、山形などで八月上旬に旧盆の決済の資金をうるために米穀商や肥料商に青田を売るのがそれで昭和五―六年の農業恐慌のとき貧農層に広く行われ農村婦女子の売買とともに社会問題の一つとなった。青田売りの根源はいうまでもなくわが国農業の零細性と零細農民の経済的貧困にあるが、さらには農村金融の不備にもよる。このような青田売りでは農民に不利な条件で売られることが多いので問題となるが暴利行為として無効となることもありうる。

あおだちげんしょう　〔青立現象〕　夏季における低温が稲の生育を遅延させて成熟しないうちに寒気に遭うので青々したまま枯れてしまうことをいう。冷害の現象である。

あおたぼめ　〔青田誉〕　田植終了後の稲の生育が良好であることをいう。米相場で用いられる言葉。

あおのり　〔青海苔〕　緑藻類の一種で浅海に産出する。特有の香気があり、炒製して調味料として広く用いられる。

あおはだなし　〔青肌梨〕　廿世紀や菊水等のように果皮が帯緑黄色を呈する梨のことをいう。

あおばはごろも　〔青翅羽衣〕　はころも科の昆虫。成虫は体長〇・八糎位。翅は黄褐色。口吻から液汁を吸い大害を与える。梨、茶、柿及び栗、梅、柑橘、桑を加害する。産卵は樹皮下にされ四、五月頃幼虫となり、新梢に群棲し樹液を吸収する。七月頃羽化。

青翅羽衣

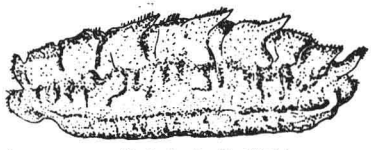
あおみどろ　接合藻類。池沼水田等に自生する緑色糸状群の淡水藻。水田に多数発生した場合は稲に害がある。

あおむし　蝶や蛾の幼虫で毛が少ないものを総称していう。毛虫に対する慣用語。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

あかいえか　〔――蚊〕　犬糸条虫（ジロフィラリヤ・イミッツ）の中間宿主で、このほかしなはまだら蚊、とうごうやぶ蚊も宿主になる。

あかいらが　〔苦爪虫〕　成虫の体長は八―一〇粍。体、翅、脚は光沢ある淡褐色で前翅の中央に灰褐黄色の線がある。卵は扁平楕円形、白色、半透明で、蛹は黄褐色、円形で七―八粍位。幼虫は淡黄緑色又は淡緑色で頭部は小さく、胴部の各節には肉質円錐突起があり、茶、つつじ、梅、桜、桃、梨、桑、柑橘等を喰害する。デリス剤、硫酸ニコチンで防除する。



あかいらが（幼虫）

あかうきくさ　〔赤萍〕　さんしょうも科の水田池沼に自生する多年生水草。茎と葉は水面に浮び茎の下面から多数の水生根を出す。繁殖力旺盛で、水田中の養分をとり、稲の生育に影響を与えることがある。

あかうきくさ

あかかし　〔赤樫〕　ぶな科。木質が丈夫なことから車軸や農具の柄等に利用される。その他薪炭材用として、また生木は防風・防火林や生垣に利用されることが多い。

あかぎ　〔赤木〕　桑、楮、大麻等の茎が赤味を帯びているものの俗称。

あかこむぎ　〔赤小麦〕　穂及び子実が赤味を帯びた小麦の品種の総称。わが国在来のものはこれが多い。白小麦に比べて粉の品質は劣るが栽培が容易で湿潤な気候でもよく成育する。

あかざ　〔藜〕　あかざ科の一年生草本。山野に広く自生する。高さは一米以上となり、若葉や新茎は食用に供しうる。

あかざけ　〔赤酒〕　熊本県特産で色の赤い酒。清酒よりも精白の粗い米を用い酝も清酒ほど叮寧に行わない。又清酒は火入れによって保存されるが、これは灰（大阪製のもの）によって保存される。そのために清酒を火持酒（ひもちざけ）赤酒を灰持酒（あくもちざけ）ともいう。

あかしんりき　〔赤神力〕　裸麦の品種本州中南部に多く栽培され、品質、収量共によく、安全性が大きい。

あかすじかめむし　〔赤条椿象〕　赤い五条の縦線をもつかめむしで、体長は一糎内外。成虫で越冬する。幼虫も成虫もせり科植物から汁液を吸う。全国的に分布する害虫。

あかたては　たてはちょう科。暗褐色に黒色の紋を配した翅をもつ蝶。幼虫は枝をもつ大きい刺を各節に具え、苧麻の類を喰害する。

あかだに　〔赤蕁〕　卵形で〇・五粍位の大きさの体をもち、体色は赤、黄、緑等。糸腺から糸を分泌し、葉の裏に網を張る。その下にかくれて葉裏から汁液を吸い葉緑質を吸収する。乾燥期に多く発生し大きな被害を与える。繁殖率高く、放任しておくとき特に温室内の植物は被害を受ける。硫黄合剤・除虫菊石鹸合剤で防除する。

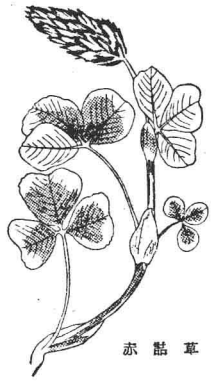
あかだまチーズ　〔赤玉――〕→エダム・チーズ

あかつかは　〔赤塚葉〕　煙草の品種で水府葉系。新潟県西蒲原郡に多い。

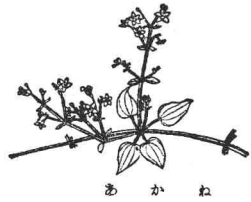
あかつち　〔赤土〕　赤褐色を呈した粘土質の土壌。赤褐色は酸化鉄を多く含む

ためである。風化したものを盆栽用土、露地挿木用土に用いる。なお→しんど、どそう

あかつめくさ　〔赤詰草〕　まめ科。クローバーの一種。原産は欧洲、西アジアで、わが国には明治時代に入り、現在は広く野生状態となっている。茎は立ち、全縁で細毛がある。葉柄は短く小葉はやや大きい。花は紫紅色。別名むらさきつめくさ、レッド・クローバー等ともいわれ、乳牛の飼料として最適の牧草で広く世界各地で栽培されている。比較的重粘な石灰質土壌でよく生育するが、極端な乾燥地又は過湿地でなければ大抵生育する。緑肥としても良好で、田畑の輪作として入れると肥沃度を増す。収量は反当九〇〇乃至一、四〇〇貫位。単作または禾草と混播する。


赤詰草

あかね　〔茜草〕　あかね科。染料用植物。本邦、朝鮮、中国の山野に広く自生する。蔓性の多年生草本。根にプルプリンという色素を含み古くから緋の染色に用いた。人工のアニリン染料によって最初に用いられなくなった天然染料である。


あかね

あかはだなし　〔赤肌梨〕　果皮の赤褐色を呈する梨の総称。長十郎、早生赤、今村秋、晩三吉等がこれに属する。

あかばないんげん　〔赤花菜豆〕　南米原産。菜豆に似た多年生植物。花は総状で赤又は白。種子は淡赤緑色で黒い斑があり食用に供する。観賞用のものが多い。

あかびろうどこがね　茶褐色の甲虫。体長八乃至一〇粍。幼虫は淡黄色で土中に棲む。五、六月頃蛹となり羽化する。成虫は菊その他の葉を喰害する。

あかまつ　〔赤松・女松・雌松〕　本州から九州にかけて広く分布し、生育力が強いので多く造林に用いられている。薪炭材・建築材・杭その他応用広く、土砂扞止林や風致林としても造林される。日本式庭園においても重要な地位をもっている。

あかまるかいがらむし　主として柑橘・梨・苹果等の害虫。介殻の径は一粍内外で円形。成虫は八月と十月に出現する。

あかもんどくが　〔赤紋毒蛾〕　どくが科。前翅は赤褐色で黄色と白色の紋があり後翅は黒色。幼虫は黒く、新芽を喰害する。苹果、梨、桜、すぐり等の害虫。

あがりでんち　〔上り田地〕　何らかの事情によって百姓が村を逃亡したときに身内のものが残っていればその者にあとを耕作させるが、関係者がいないときはその土地を取上げて入礼とか共同耕作させる習であった。この土地を上り田地という。

アカリファ　温室用の観葉植物。挿木で繁殖する。多量の給水を必要とする。

あがりまゆ　〔揚繭〕　繰糸のときに糸の端を見出すことができない繭をいう。屑繭と共に真綿の原料とする。

あきおちげんしょう　〔秋落現象〕　老朽化水田に多く発生する。水稲の栄養生長の頃は普通の生育を示すが生殖生長に入ると急激に生育不振となり、下葉から枯れ上り、各種病気が発生して減収とな

ることをいう。——→ろうきゅうかすいでん

あきそさい　〔秋蔬菜〕　生育期間四カ月以内で通常七—九月に播種され、九—十二月に収穫される蔬菜。秋蒔大根、蕪、白菜、春菊、菠薐草、チシャ、花椰菜、並びに抑制栽培を必要とする馬鈴薯、胡瓜、菜豆、茄子、蕃茄、早生甘藍等。

あきそば　〔秋蕎麦〕　晩夏から初秋に播種して、晩秋に収穫する蕎麦。短日性植物に属する。

あきだいこん　〔秋大根〕　晩夏から初秋までに播種し、晩秋から初冬にかけて収穫する大根。

あきだいず　〔秋大豆〕　初夏に播種して、晩秋に収穫する大豆。生育期間は比較的短いが、一般に小粒で収量も少ない。

あきたけん　〔秋田犬〕　秋田産の犬でわが国で最も純粋な日本犬の一種。体質強健で耳が立ち巻尾である。性質がやや粗野であるが敏捷で、飼主に対しては従順であるため番犬に用いられている。

あきたしゅ　〔秋田種〕　秋田県産の鶏の兼用種。脚色が黄色である以外は大体名古屋種と同じである。

あきつぎほう　〔秋接法〕　主として葡萄に行われている枝接の一種。秋季砧木が木質化した直後に地上四、五寸の所を斜めに長さ五分位、深さ髓に達する程度に切り下げ、穂木は熟梢又は半熟梢を一芽ずつに切り、先端は芽の方向に向する方を三分の一、外側を三分の二削り、砧木の切口に挿入し緊縛、盛土する。

あきなえ　〔秋苗〕　藺の栽培法。八月苗ともいう。八月に畑苗をとって田に植えつけ、肥培管理して増殖させた後に本田に移植する。よい苗をうることを目的としている。

あきなり　〔秋成〕　秋季納入する年貢のこと。田の年貢は多く秋に収穫したものを納めることからこの名が出た。畑の年貢をこれに対して夏成という。

あきのきりんそう　〔秋の麒麟草〕　葉はよめなに似ている。黄色穂状の花をつける。株分で殖やす。開花は七—八月頃で、西洋種のものが美しい。

あきのななくさ　〔秋の七草〕　秋の山野に咲く代表的な草花。萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝顔の七種をいうが、朝顔でなく桔梗という説もある。

あきまき　〔秋播〕　麦類栽培に際し秋に播種することをいう。春播に対する語で気候温暖な地帯で行われる。大麦の場合、北海道では春播を可とするが本州以南では秋播でないと好結果をうることができない。

あきまきおおむぎ　〔秋播大麦〕　冬大麦ともいい、冬季比較的温暖な地方で秋季播種し、初夏に収穫するものをいう。

あきまきこむぎ　〔秋播小麦〕　秋季に播種する小麦をいう。気候温暖な地方に行われる。春播小麦に対していう。

あきまきせい　〔秋播性〕　麦類は全発育過程を経過して成熟するためには冬季一定の低温を経過しなければならない。このために播種を秋早く行う。これを秋播性といい、品種によって遅速がある。早く播かなければ十分収量を挙げえないものを秋播性程度が高いといいⅦで表わす。ついで遅くなるにつれてⅥ、Ⅴ…Ⅰとなり、Ⅰは冬季の低温を経なくとも成熟し春播するもので、この場合、秋播性程度は最も弱いという。

あきみ　〔秋果〕　無花果の八—九月から十月頃成熟する果実。前年生の頂芽又はこれに次ぐ腋芽が伸びた新梢の三—四節目以後の葉腋に着生する。

アキメネス　いわたばこ科。温室用根

茎植物。高さ三〇糎位。葉腋に繁又は繁紅色の花を六―七月頃つける。鉢植とする。春、球根を五寸鉢に五―六個植え暗所で灌水し、発芽後漸次日光にあてる。乾燥に弱いから灌水を十分にしなければならない。花が終ったならば次第に水を断ち、茎が枯れてから乾燥貯蔵をする。

アキレア―→のこぎりそう

アクイレジア―→おだまき

あくせいカタールねつ　〔悪性――熱〕春秋に牛によく起る病気。殊に栄養のよい若い牛が罹り易い。眼や鼻の粘膜が侵され、膿や血液の混った鼻汁が流れ、次第に喉頭粘膜も侵され、咳が出て呼吸困難となる。本病は急性に来て三―五日の後斃死するものもあるが、慢性的に起って三―四週間経過するものもある。

あくせいすいしゅ　〔悪性水腫〕土壌や乾草等にいる悪性水腫桿菌の創傷感染による草食獣（馬に多い）の急性熱性伝染病。感染し易い創傷は舌創、裂創、刺創、去勢創、陰嚢の創傷等である。本菌は組織液を分解してガスや毒素を産生し血管が次第に拡張するために血液中の水分が組織の間隙に流れ出て水腫が起る。浮腫には固有の悪臭があって、黄赤色の液が流れ出る。遂には呼吸困難、心臓衰弱等が現われ悪臭の液状便を排泄する。療法としては浮腫部を切開して空気に触れさせ、水腫液を圧出して消毒する。同時にその周囲に消毒液を注入する。感染後一両日に斃死するから手当は急を要する。

アクチノミセス　放線状菌のアクチノミセス科、アクチノミセス属をいう。死物寄生で土壌中に多い。ストレプトマイシン等の特効薬はすべてこの属の産出する物質である。

アグレオネマ　てんなんしょう科。温室用観葉植物。繁殖は根分又は挿木。

アクロクリニウム　きく科。一年草花卉で、草丈三〇糎位。花は六―七月に開き白又は淡紅色等。

アグロスティス　禾本科。一年草花卉で切花用。乾燥花卉としてもよい。

あげつぎ　〔揚接〕砧木を掘り上げて適宜の場所で接木を行うこと。主として梨や苹果のように活着の容易な植物に適用される。

あげどこ　〔揚床〕高設温床ともいい床の地面を掘らず地上に土や醗熱物を盛り上げて作る温床。一般に逃熱し易く、温度の変化も大きいので排水不良地やその他特別の目的以外には作らない。

あげはちょう　〔揚羽蝶〕柑橘等の害虫。翅は黄色乃至淡緑色を呈し、黒紋を有する。卵は淡黄色球形。年三回発生する。幼虫は柑橘類、山椒等を喰害する。幼虫発生期に砒酸鉛加用石灰ボルドウ液を散布する。

揚羽蝶

あけび　〔木通〕本邦原産。あけび科に属する落葉蔓性果樹。葉は五個の小葉からなる複葉。花は淡紫色の単生花。果実は二―三寸のソーセージ形で内に多数の種子を含み、種子に附着する粘性の漿液を食用とする。

あけび

あけびこのは　やが科。大形の蛾で静止しているときは木の枯葉のように見え

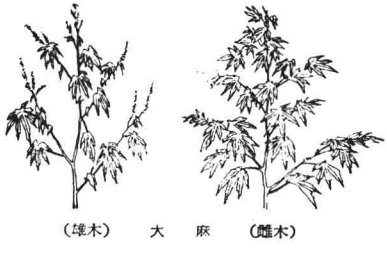
る。年二回発生。夜間、果物の成熟したものに飛来し汁液を吸い害を与える。幼虫はあげび等の葉を食するのでこの名がある。駆除法は糖蜜誘殺。

あげまき　〔揚播〕　水稲の種子を袋に入れて、清潔な河川や池の日蔭又は水を入れた桶等に浸し、一定の日時を経た後取り出し、蓆の上にひろげ籾の表面の水が乾いた時に播くことをいう。

アゲラタム　別名かっこうあざみ。葉は縁に鋸状の切込みがあり、円形。花は白紫又は淡紅色で五―七月頃咲く。播種は秋で、フレームで苗を仕立てた後花壇に春植える。

アコラス　てんなんしょう科。観葉植物で水盤で水栽する。

あさ　〔大麻〕　くわ科。中国及び本邦に古くから栽培されている繊維作物。現今では世界各地で繊維又は種子の収穫を目的として栽培されており、前者を目的とするものは温帯地方の南部に多く、後者を目的とするものは北部に行われる。夏季比較的高温多湿で、収穫期に雨量の少ない気候に適し、土壌は保水力の大きい排水可良な壌土又は砂壌土を好む。雌雄異株の一年生草本で、丈は一・八―三米。茎は方形で凹溝があり有毛。密植すると上部にだけ枝を出し、疎植であれば下部からも多数枝を分岐する。品種により緑色及び帯赤色のものがある。葉は五―一一枚の小葉からなる掌状複葉。葉柄は長く、茎の各節に対生しているが、梢の部分では互生する。雄花は梢上部で短い総状をなし、淡黄色の五蕚と五雄蕊を有する。雌花は梢上に近い部分の葉腋に穂状をしてつき、子房は托葉と一枚の蕚で包まれ、二本の花柱を露出する。風によって運ばれた花粉で受精し、各子房に一種子を生ずる。種子は硬く卵形又は球形、二方に稜角があり、外皮は濃褐色で光沢がある。胚乳には三〇%内外の脂肪と二〇%内外の蛋白質を含む。種子はおのみといい、食用又は鳥類の飼料として用いる。本邦における主産地は、栃木・長野・広島・宮崎・岩手の諸県である。



（雄木）　大麻　（雌木）

品種には赤木、白木、青木種がある。三月下旬―四月上旬に播き七月中旬―八月上旬に収穫し成育期間は一一〇―一二〇日程度。刈取った麻は二分位麻風呂に入れ、三日間乾してから、晴天の日を選んで水に浸して乾し、屋内に積重ねておき皮がはぎやすくなった所で剝皮する。粗皮は麻挽合（ひきだい）の上で挽子（ひきこ）で除去しこれを陰干する。織物用としては更にこれを漂白する。→あさひき、あさぶろ

あさがお　〔朝顔〕　熱帯アジア原産。ひるがお科に属する一年生草本。葉は三裂で互生し、茎と共に毛茸がある。花は漏斗状をした大形の合弁花で、茎の上方の葉腋上に着生し、早朝開花する。花色は品種によって種々ある。六―八月頃開花する。開花期に葉が斑点病にかかることがよくあり、美観を損ずる。防除にはボルドウ液を散布する。

あさかみきり　〔大麻天牛〕　あさの害虫。成虫は黒色で胸部、翅鞘に三条縦の白色帯がある。年一回発生し幼虫で越年し六、七月頃成虫となる。幼虫は頭部褐色、胴部乳白色で髄を喰害する。

あさづけ 〔浅漬〕 原料大根を生のまま、或は二―三日間乾燥したものを漬込んでつくる。長期貯蔵の目的でなく、一時的のものである。原料一〇貫目に対し麹一貫目、塩五〇〇匁の割で漬ける。

あさのみかす 〔麻実粕〕 大麻の種実を圧搾した粕をいう。暗灰色で軽い。飼料又は肥料として用いる。

あさのみむし 大麻の害虫。光沢ある黒緑色で後脚肥大して跳躍する。成虫で越年し年一回発生する。防除は成虫、幼虫の捕殺を行う。

あさひ 〔旭〕 水稲の品種。中稈、品質良好な晩生種。これから育生された系統のものは、本州中南部及び九州にまたがって広く栽培され、中・早生の品種もある。晩生種の旭一号は、中稈、短芒、品質優良、多収であり、関東から九州に至る多くの県で奨励されている。

あさひかん 〔旭柑〕 文旦の類。果実は大きく円又は扁円形で果梗の附著部に多数の皺がある。果頂は平らで輪環がある。果肉は赤黄色。多漿で酸味が強く、多少の苦味がある。十二―一月に採収される。色沢が鮮かなためジャム製造用によい。

あさひき 〔麻挽き〕 製麻工程中、靱皮部から繊維以外の物質を除く作業をいう。

あさぶね 〔麻舟〕 製麻工程において洗麻を水に浸漬するために用いる細長い長方形の水箱をいう。

あさぶろ 〔麻風呂〕 製麻工程において、生麻の茎の組織を熱湯に浸して殺し、靱皮しやすくするために用いる長方形又は円筒形の桶をいう。

麻風呂

麻蒸桶

あさるいのさいきんさいはんてんびょう 〔麻類の細菌性斑点病〕 黄麻に七月下旬頃から発生し、葉に針頭大の褐色の斑点を生じ、後拡大して多角形となり暗緑色、水浸状に変る。病原菌は病葉について地表で越冬し翌年発生する。防除には耐病性品種を選び無病地に栽植することが必要である。

あさるいのたんそびょう 〔麻類の炭疽病〕 苎麻に夏から秋にかけて発生。葉に円形の病斑を生じ病斑の内部は淡褐又は灰色で、周囲は褐色又は黒褐色。茎では初め円形、次に紡錘形の病斑を作る。

あさるいのはんてんびょう 〔麻類の斑点病〕 八月から九月にかけて発生し葉では初め表面に暗褐色の斑点を生じ後に拡大して円形、不正形となり中央は淡褐色で周囲は蒼黄色に変り葉は乾枯し落葉する。胞子、菌絲塊の型で越冬する。密植を避け、三―五斗式ボルドウ液を散布する。

アジアきょくとうけいざいいいんかい 〔――極東経済委員会〕 Economic Commission for Asia & the Far East. 略称ECAFE(エキャッフェ)。国連経済社会理事会の下部機構。欧洲、ラテン・アメリカ、中東の三経済委員会と同列の地域別委員会であり、一九四九年三月設置された。その目的はアジア経済の復興、アジア内及びアジアと他地域間の経済交流に関する資料の蒐集、情報の交換、勧告を行うことである。正会員一四箇国、準会員九箇国(日本―一九五二年五月加入を含む)事務局はバンコック。

アジアてきせいさんようしき 〔――的生産様式〕 灌漑農業を基礎とし、専制君主を中心とする共同体的土地所有の

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com